

「王昌」とは誰か

漢文学教室 塩 見 邦 彦

一

今から千数百年も昔の中国の詩を読んでいると、わかっているつもりで詩語が、実は全く把えどころのない、漠たる言葉として、我々の前に存在している場合があることに気づかされる。この小論でとりあげようとする「王昌」という人名も、実はそのような詩語のひとつである。しかも、この詩語は、六朝詩には全く姿を見せず、もっぱら唐詩中にのみ存在した後、次の宋代にあっては、詩人たちから敬遠され、その上、意味不明な措辞のひとつとして、詩話の中で議論の対象にとりあげられる運命をたどっている。以来、現在「王昌」を論ずる場合でも、「伝説中の人物であり、誰であるか拘泥する必要はない」⁽¹⁾とか、あるいは、「『情郎』（色男）に類する人物の一人である」⁽²⁾という風に済ませられてしまっている。けれども「王昌」が伝説中の人物と言われるからには、どのような過程でそのように規定されるようになったのかを見ておく必要があるし、「情郎」の同類語彙となったのには、それなりの理由に基づいたはずで、それについても確かめておくことは無駄ではなからう。

唐詩においては、初・盛・中・晩唐と、「王昌」はどの時代の詩人の詩にも詠われており、そこには、唐代詩人の「王昌」に対する共通の認識のようなものが感じられるのであるが、では何故、「王昌」が唐代の詩人によってのみ詠われたのか、なぜ、唐代の詩人たちは「王昌」という人名に共通の認識と思われるものを感じていたのだろうか、といったことは皆目不明である。この小論が、どこまでそれらの疑問に答えうるかは、はなはだ心もとないが、まず、「王昌」に触れた宋人の文章を糸口として、一応の試案を提示してみようと思う。

二

宋の王灼（?～?）撰による『碧雞漫志』巻二には、以下のような指摘がある。

古書亡逸固多，存於世者亦恨不盡見，李義山絕句云「本來銀漢是紅牆，隔得盧家白玉堂，誰與王昌報消息，盡知三十六鴛鴦」，而唐人使王昌事尤數，世多不曉，古樂府中可互見，然亦不詳也。

（古書の亡逸固より多く、世に存するもの亦た尽く見ざるを恨む。李義山の絶句に云ふ、「本来銀漢はれ紅牆，隔て得たり盧家白玉の堂，誰か王昌の与に消息を報ぜん，尽く知る三十六の鴛

鳶」と。而して唐人、王昌の事を使ふこと尤も数しばなり。世多くきと暁らざるも、古樂府中に互ひに見るべし。然れども亦た詳ならざるなり。）

上記のように述べた後、二つの樂府を引用する。ひとつは「相逢行」（『樂府詩集』卷三十四，古辭）であり、他のひとつは「河中之水歌」（『樂府詩集』卷八十五，梁武帝講）である⁽³⁾。そして、その結論として、以下のように続ける。

以三章互考之，即知樂府前篇所謂白玉堂，與鴛鴦七十二，乃盧家。然義山稱三十六者，三十六雙即七十二也。又知樂府後篇所謂東家王，即王昌也。

（三章を以って互ひに之を考ふるに，即ち樂府の前篇の所謂，白玉の堂と鴛鴦七十二は乃ち盧家なるを知る。然れども，義山，三十六と稱するは，三十六の雙は七十二也。又樂府の後篇の所謂，東家の王とは，即ち王昌なるを知るなり，と。）

一章において、「王昌」は「六朝詩には全く現われない」と言ったが、梁武帝の樂府には「王」某として現われる。六朝詩人は、詩中に「王昌」を用いてはいないものの、六朝樂府には「王」某と現われ、唐詩人はそれをふまえた上での新しい意義づけの下に、それぞれ各自の詩に取り入れたものと思われる。しかし、梁の武帝の樂府と唐詩との間には、数百年の隔たりがあり、どのような経過を経て、後に見られるような「王昌」像ができあがってゆき、唐詩人の「王昌」像に落ちついていったものなのか、ということについては、未だ全く不明瞭である。そこで、次に梁の武帝の樂府に用いられたということから、『漢書』『後漢書』等に見られる「王昌」について考えてみよう。

三

- 一. (1)元康四年，競（景嚴候王競）玄孫，長安公士昌詔復家。（漢書卷十六）
 - (2)京兆尹王昌釋寶，二年轉爲鴈門太守。（漢書卷十九・下）
 - (3)南陽太守王昌爲右扶風，三年免。（漢書卷十九・下）
 - (4)……中少府建威候王昌爲中堅將軍。（漢書卷八十四）
 - (5)……詔遣中郎將韓隆，王昌，副校尉甄阜，侍中謁者帛敞，長水校尉王敘使匈奴……（漢書卷九十四下・九十六下）
- 二. (1)王昌一名郎，趙國邯鄲人也。素爲卜相工，明星歷，常以爲河北有天子氣。……（後漢書卷十二）
 - (2)……催怒，呵遣鄴，因令虎賁王昌追殺之，昌僞不及，鄴得必免……（後漢書卷七十二・三國志・魏書・獻帝起居注）

以上、多少の煩瑣をいとわず、『漢書』・『後漢書』等に現われる「王昌」なる人物を列挙してみたが、どの文章にも、楽府におけるような「東家」の「王」某らしき記述は見られない。また、唐詩人たちが共通の認識としていた「王昌」という人物の最低条件らしきもの、つまり、(1)東隣に住んでいる男性であること。(2)宋玉との対比で「王昌」が考えられていること、等のイメージからは、ほど遠い「王昌」であるということができよう。いきなり、そこまでふみ込まなくても、少くとも、上記引用文中の「王昌」は、楽府からうけるイメージのそれとは、全く異なるものであることは明白であろう。

先ほど、「最低の」と限定をつけて、唐詩人たちが共通の認識とした条件らしきものを二つばかり挙げた。その第二に、宋玉との対比で「王昌」が詠われることを指摘したが、その例をいま唐詩人の詩句で確認しておこう。

| | | |
|----------------|---------------------------|-----------|
| 王昌是東舎 宋玉次西家 | 王昌は是れ東舎 宋玉は西家に次る | (王 維 雜詩) |
| 自有王昌在 何勞近宋家 | 自ら王昌の在あり 何ぞ宋家に近きを勞せん | (陸龜蒙 偶作) |
| 自能窺宋玉 何必恨王昌 | 自ら能く宋玉を窺ひ 何ぞ必ずしも王昌を恨まん | (魚玄機 贈鄰女) |

以上、宋玉(宋家)との対比で「王昌」が詠われる詩句を掲げたが、それでは何故、宋玉が「王昌」との対比として挙げられるのであろうか。ここで我々は、第一の条件として挙げた「東隣」に住んでいる人物というイメージと、宋玉という実在した人物とを思い浮べる時、以下の文章があったことに気づかされる。

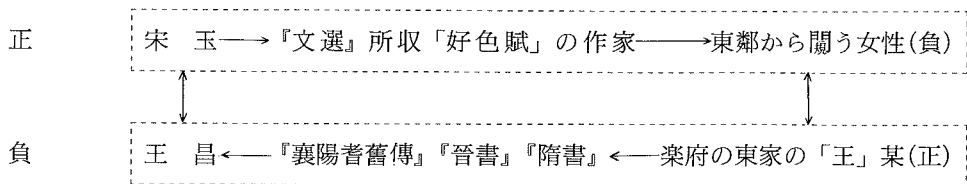
踰東家牆而摸其處子則得妻。(孟子・告子篇)
(東家の牆を踰へて其の處子を摸けば、則ち妻を得たり。)

天下之佳人，莫若楚國。楚國之麗者，莫若臣里。臣里之美者，莫若臣東家之子。東家之子增之一分，則太長，……然此女登牆闚臣三年，至今未許也。(宋玉 登徒子好色賦序，文選卷第十九)
(天下の佳人は楚國に若くはなし。楚國の麗しき者は臣が里に若くはなし。臣が里の美しき者は臣が東家の子に若くはなし。東家の子は之を増すこと一分なれば、則ち太だ長く、……然れども此の女、牆に登りて臣を闚ふこと三年なるも、今に至るまで未だ許さざるなり。)

恐らく、上記の『孟子』や『文選』は、伝統的な儒教社会の中で、六朝士大夫の教養として、当然よく読まれ、また、六朝の延長としての唐代の士大夫にあっても、各人がただちに思い浮べられる文章であった。そしてそれは、上記の文章の作家である孟子や宋玉と不可分の関係として捉えられていた、ということの思い併せるならば、宋玉と東家との関係は、伝統的な思考パターンの上で、明確に、正統的な位置を与えられ続けてきたと言えるだろう。謂わば、中国の詩人たちによって、正統的なプラスの位置づけのもとで、宋玉も孟子もその意識の内に保たれてきたと言いうる。とこ

ろが、宋玉との対比で詠われる「王昌」の方は、マイナーな人物として、宋玉ほど明確な位置は与えられてはこなかったと言っても過言ではない。「王昌」の側に立って言えば、唐詩では、宋玉は「東隣」をうかがう女性を描いた「好色賦」の作家というより、「東隣」の男性という立場からみた人物として位置づけられており（つまり、女性から男性へ視点を変えて見ている）、その彼との対比で「王昌」が扱われているのである。

元来がマイナーな人物であるが故に、宋玉を正とすれば、「王昌」は、負の位置を無意識の内に詩人たちによって背負わされてきた、といってもよいのではなからうか。やや単純化して、換言すれば、メダルの表裏の関係のように、宋玉が正であれば、「王昌」は負であり、東隣の女性との関係からすれば、男性の方が正であり、女性の方が負をなすというような思考パターンが、詩人たちの内に無意識裏に働いた故ではないかと考えられるのである。（下図参照）



（矢印は唐詩人の連想の方向を、↔印は対応関係を示す）

少くとも、以下にみるように『襄陽耆舊傳』等に描かれる「王昌」は、決して正の位置づけを持った、はなばなしい人物としての「王昌」ではないし、女性から見て理想の男性としての「王昌」でもない。

王昌字公伯，爲東平相散騎常侍，早卒。婦任城王曹子文女。昌弟式，爲渡遼將軍長吏。婦尚書令桓楷女。昌母聰明有教典。二婦入門，皆令變服，下車。不得踰侈。後楷子喜尚魏主，欲金縷衣見式婦。嘉止之曰，其嫗嚴固，不得倍。爾不須持往，犯人家法。（襄陽耆舊傳，王昌）⁽⁴⁾

『襄陽耆舊傳』（晉・習鑿齒撰）の「王昌」は東平の相としての「王昌」であり、今問題にしている「東隣」や宋玉との対比については、いささかも触れられていない。ところが、上記『襄陽耆舊傳』とほぼ同様の内容を持つ文章が、『晉書』に現われる。

太康元年，東平王楙上言，相王昌父恣，本居長沙，有妻息。漢末使入中國，值吳叛，任魏爲黃門郎，與前妻息死生隔絕，更娶昌母，今江表一統，昌聞前母久喪，言疾求平議（晉書卷二十）

『晉書』は唐代の成立（唐・房玄齡等撰）であり、『襄陽耆舊傳』の文章が、「王昌」の母親に重点を置いて述べるのに対し、『晉書』のそれは「王昌」の態度に重点を移して述べていて、同一人物と思われる、次の『隋書』（唐・魏徵等撰）になると、「王昌」の父のとった態度へと重点を移し、しかも、死亡したと思われていた先妻をそのままにして、再婚して後妻という、二人の母が偶然にも生じた場合、いづれに養育の恩が有るのかという議論の中で引用されるものであり、この「王昌」の父、王恣の場合が、そのような話の典型と考えられていたと思われる節が有るのである。しかし、そのことは当面の問題とは直接関係がないので、しばらく置くとして、少くとも「王昌」が『襄陽

耆舊傳』『晉書』『隋書』の三書に現われることは注目に値する。

昔長沙人王恚，漢末爲上計詣京師。卽而吳・魏隔絶，恚於内國更娶，生子昌。恚死後爲東平相，始知吳之母亡，便情繫居重，不攝職事。(隋書卷七十一，誠節，劉子翊傳)

つまり、以上のことから言えることは、『襄陽耆舊傳』から『晉書』『隋書』へと、少しずつ視点を移しながら、宋玉と比べて、どうみてもマイナーな人物である「王昌」が、従来、梁の武帝の楽府で詠われていた、東家の「王」某という人物に、いつの間にか重なり、唐代頃までには、宋玉と対をなす人物としてのイメージで、詩人たちの中に定着していったと考えられるということである。そのように定着するには、宋玉という人名との対をなすということで「王昌」の位置が相対的に引き上げられたであろうし、「王昌」の母親や父親の有名な話柄も与って大きな作用をなしたであろうことは言を俟たない。

しかるに、元来がマイナーな人物像であり、唐代においては「東隣」や初恋の男性像として意識されていた「王昌」も、宋代に入ると、もはや省みられることさえなくなり、最初に引用したような、議論の対象としてのみ、専らとりあげられるようになっていったのではないかとと思われる。宋玉が肯定的な人物としてまずあり、その宋玉の文章から楽府に詠われた東隣の「王」某と、東平王としての「王昌」が、マイナーではあるが、詩人たちの中にふくらんでいった。楽府に詠われた内容から、当然、理想的男性像も附与されたであろうし、あくまでも、男性社会での「王昌」が前面に押し出されて詠われることとなった。謂わば、「王昌」がプラスの評価を持ちうる(あるいは持ちえた)までに成熟していたのが、初唐という時代ではなかったか、と考えるのである。そこで、唐代の詩人たちは、「王昌」をどのように詩中に詠っているのか。次章でそれをみてみようと思う。

四

『全唐詩』中に用いられる「王昌」は、調査によれば、全部で十例あるが、以下にみるように、初唐から晩唐まで、各時代の詩人たちの詩にとりあげられること、前述の通りである。第三章で宋玉との対比で挙げた例句も含めて、時代順に並べてみると、以下のようになる。

- | | | |
|-----------------------|-----------------------------|----------------|
| (1)南國自然勝掌上 東家復是憶王昌 | 南国の自然は掌上に勝り 東家復た是れ王昌を憶ふ | (上官儀 和太尉戲贈高陽公) |
| (2)王昌是東舍 宋玉次西家 | 王昌は是れ東舍 宋玉は西家に次る | (王 維 雜詩) |
| (3)十五嫁王昌 盈盈入畫堂 | 十五にして王昌に嫁ぎ 盈盈として画堂に入る | (崔 顥 王家少婦) |
| (4)莫愁私地愛王昌 夜夜箏聲怨隔牆 | 莫愁は私地に王昌を愛し 夜夜箏声 牆を隔つを怨む | (元 稹 箏) |

- (5) 王昌[○]且在牆東住 王昌^{しばら} 且く牆東に住むことあらば
未[○]必[○]金堂得免嫌 未だ必ずしも金堂にて嫌を免るるを得ず (李商隱 楚宮二首<sup>一作天本
閑話舊事</sup> 其二)
- (6) 誰[○]與[○]王昌報消息 誰か王昌の^{なめ}与に消息を報ぜん
盡[○]知[○]三十六鴛鴦 尽く知る 三十六の鴛鴦 (李商隱 代應)
- (7) 自有[○]王昌在 自ら王昌の在あり
何[○]勞[○]近[○]宋家 何ぞ宋家に近きを勞せん (陸龜蒙 偶作)
- (8) 聞[○]道[○]離鸞思故郷 聞^{さく}道^ならく 離鸞故郷を思ふ
也[○]知[○]情願嫁王昌 也^また知る情願くば王昌に嫁がん (唐彦謙 離鸞)
- (9) 何[○]必[○]苦[○]勞[○]魂[○]與[○]夢 何ぞ必ずしも魂と夢とに苦勞せん
王昌[○]只[○]在[○]此[○]牆[○]東 王昌は只だ此の牆東にあるのみ (韓 偓 晝寢)
- (10) 自[○]能[○]窺[○]宋[○]玉 自ら能く宋玉を窺ふも
何[○]必[○]恨[○]王昌 何ぞ必ずしも王昌を恨まん (魚玄機 贈鄰女)

以上の如く、十例を検索できるが、これら十例の詩句から浮んでくる「王昌」という人物のイメージは、第二章でみた「王昌」と比べてみても、その共通項が更にふくらんでいるということができよう。もう一度、整理しなおしてみると、

- 一、住居は東隣であること。
- 二、王昌が宋玉との対比で意識されていること。
- 三、未婚の女性からみて、理想の男性かあこがれの男性であること。
- 四、裕福ではないらしい家庭の息子であること。

の四点に集約できるように思われる。これらの条件を、第二章でみた梁の武帝の楽府に登場する「王」某や『襄陽耆舊傳』等に現われる「王昌」が、ことごとく充たしているとは言えないが、「王昌」という名前、孟子・告子篇で言われる東牆（東隣）、そう裕福ではなく早く没した人物等の条件から、六朝を経て隋・唐へと語りつがれてゆく過程で、イメージを与えられ、時代の要請に合うよう変容させられ、以上の四点に集約されるようなひとりの人物として、「王昌」は唐詩人たちの意織の中に定着していったと考えられるのである。そのように見た時、事実を重視する中国文学の中で、フィクション的な要素を多分に有する小説の世界と、「王昌」の変貌過程は、相い通づる面を持つと言えるかも知れない。楽府に詠われた人物と実在した人物との結びつき、晋から隋までの時間的な長さ、六朝詩人は一例も「王昌」を詠わず、逆に唐代になって、初めて堰を切ったように詠いはじめる唐代の詩人たち。これら、さまざまな要素が、複雑にからみ合い、長い時間の中で徐々にイメージを変え、詩の題材も視野も、六朝期とは比べものにならない位の広範囲にわたっていた唐代の詩人たちに、一つの新しい意味を持ちうるまでに成長した「王昌」像ではなかったであろうか。一人の「王昌」は、実在の「王昌」と同時に、時代の中で徐々にイメージを附与された「王昌」でもあった、と結論づけてよいのかも知れない。

註

- (1) 『李商隱詩歌集解』(劉学鍇・余恕誠著, 中華書局刊, 1988) 第五冊の注では「疑爲傳説人物, 不必泥」(1815頁) という。
- (2) 『崔顥・崔國輔詩注』(万竟君注, 上海古籍出版社刊, 1985) では「總之是屬子“情郎”一類的人物」(22頁) という。なお, 最近出版された『全唐詩典故辭典』上・下(范之麟・吳庚舜主編, 湖北辭書出版社刊, 1989) にも「王昌」の項目は挙がっていない。
- (3) 「相逢行」: 相逢狹路間, 道隘不容車, 不知何年少, 夾轂問君家, 君家誠易知, 易知復難忘, 黃金爲君門, 白玉爲君堂, 堂上置樽酒, 作使邯鄲倡, 中庭生桂樹, 華燈何煌煌, 兄弟兩三人, 中子爲侍郎, 五日一來歸, 道上自生光, 黃金絡馬頭, 觀者盈道傍, 入門時左顧, 但見雙鴛鴦, 鴛鴦七十二, 羅列自成行, 音聲何嚶嚶, 鶴鳴東西廂, 大婦織綺羅, 中婦織流黃, 小婦無所爲, 挾瑟上高堂, 丈人且安坐, 調絲方未央。(古辭)
「河中之水歌」: 河中之水向東流, 洛陽女兒名莫愁, 莫愁十三能織綺, 十四採桑南陌頭, 十五嫁爲盧郎婦, 十六生兒似阿侯, 盧家蘭室桂爲梁, 中有鬱金蘇合香, 頭上金釵十二行, 足下絲履五文章, 珊瑚桂鏡爛生光, 平頭奴子擎履箱, 人生富貴何所望, 恨不早嫁東家王。(梁武帝)
- (4) 『襄陽耆舊傳』王昌の条については、『王右丞集箋注』(清・趙殿成箋注) からの引用によった。

(平成2年4月20日受理)

(附記)

上記小論を提出した後、「王昌」についての詩を以下の如く検索したが、詠まれている内容は唐人の詩の延長であり、論旨そのものに影響はないように思われる。

東鄰移去復西鄰
那得王昌與宋玉 (袁宏道 代廣陵姬用前韻)

白玉堂前鴛鴦六六
誰與王昌說 (錢謙益 十六夜有感再次前韻)

但似王昌消息好
履箱擎了使相從 (同 上 庚辰仲冬河東君至止半野堂有長句之贈次韻奉答)

從此雙棲惟海燕
再無消息報王昌 (同 上 合歡詩四首 六月七日葺城舟中作其二)

